

## 吉原地区

江戸の街では、吉原が夜の歓楽、ファッション、そして娯楽芸術の中心地となっていました。徳川幕府（1603年-1867年）は、売春を主要都市にそれぞれ1つ定められた遊郭に限定していました。京都には島原、そして大阪には新町があり、江戸では吉原があったのです。

吉原は元々現在の日本橋にありましたが、1657年の明暦の大火で焼失しました。その後地区は奥浅草に移転してこの地域全体の繁栄や発展に重要な役割を果たし、また浅草を江戸の娯楽の中心地としての確立に一助を担いました。観光客は、日中には浅草寺を参拝し、夜になると吉原の花魁との交流を楽しみました。この花魁の美しさは浮世絵の版画や歌舞伎の演目で後世にも伝えられており、また今日でも奥浅草の江戸吉原花魁道中などのイベントで未だに生き続けています。

吉原で顧客のもてなしもしていた芸者（ただし芸者は売春に関与することが厳しく禁じられていました）と同様、しばしば華やかな衣装を身に着け、手の混んだ化粧をほどこしていた花魁は、熟練のエンターテイナーであることが要求されていました。社会階級が厳密に決められていた時代であったにもかかわらず、身分の低い商人から、高貴な侍まで、あらゆる身分の人々が吉原では平等に楽しむことができました。

そういった地区があったという物理的な証拠はほとんど残っていませんが、吉原の花魁は歌舞伎、浮世絵、音楽や着物作りなどの芸術に大きな文化的影響を及ぼしました。花魁が身に着けた衣装から、特徴的なヘアスタイル、そして話し方に至るまで、花魁は吉原の心の拠り所だったのです。